

癌はどういう病気か ——癌で死なないために

医学博士 長 廻 紘

◆経歴◆

1966年 東京大学医学部卒業
1968～1995年 東京女子医大消化器内科
1995～2004年 群馬県立がんセンター院長

1. はじめに

癌は治せる病気です。病気が治るためには次の3点が必要です。①原因が分かる、②見つける検査法がある、③治療法がある、です。

半世紀前まで、癌は死病と恐れられていました。①と②がなく、③はあっても不十分なものでしたから。たとえば胃癌は原因不明で、大きくなって外から触知可能になるまで診断不能、そして治療法は外科的切除のみで、かつ不完全でした。

しかし、現在、①に関して癌は生活習慣病であり、ピロリ菌が関与している、②について検査法は例外を除いてほぼ完全、③の治療法も進歩し、洗練されたものになりました。

すなわち、「癌は治る、治せる病気」です。生活を改め(禁煙、減塩など)、よい・信頼できる医者、癌検診を受け、よい医者^{*}に治療を任せる。これが「癌で死なない」の全てです。

しかし、癌は、生活習慣病のすべてと同じように、何がいけないかは完全には分かっておらず、予防方法も不十分です。さらに加齢とともに危険度は増していきます。

また、癌は、病因(生活習慣)のほかに遺伝子が発病に関与します。タバコを吸っていても癌関連の遺伝子が無い場合には肺癌にならない、ということが起こり得ます。従って癌に罹っているという前提で行動(検診を受ける)する必要があります。

治らないのは、自分か医者が悪いのです。「自分が悪い」というのは、生活習慣を改めないか、癌検診を受けない、「医者が悪い」^{*}というの、早期に癌を発見できないという無能力ということです。(※銀行員に上中下があるように、医者にも上中下がある。)

しかし、そうはいつても、癌は現代医学でも未解決の部分が多く、記してゆけば際限はありません。ここからは、本誌の性格上、要点を述べるに留めたいと思います。

2. 癌は生活習慣病

癌は小さいものがだんだん大きくなる生活習慣病(「LSRD」= Life Style Related Disease)です。いきなり完成した癌ができるものではありません。

最初は細胞一個の変異ですが、経時的に大きくなり、数年経ってもまだ無症状の早期癌、さらに10年位でやっと大きな塊となり、症状のある立派な病気となります。

生活習慣病とは長年の生活、とくに食生活のつけが徐々に肉体に及ぼす負の遺産・負債です。長い年月をかけてできあがった全身性の病気なので、完全に治るということはなく、ただ悪くならないように管理(コントロール)できるだけです。しかし、癌だけは胃癌のようにある部分に局限し

のできる、それを除く(胃と共に切除する)と、「治った」と見なすことができます。

3. 予防

癌を治すとは、a.一次予防：喫煙などの生活習慣を改め、そもそも癌ができないようにする、b.二次予防：癌ができて、検診によって早期に発見して治す、c.三次予防：進行した癌であっても洗練された治療を集中して死を免れさせ、癌は残っていても天寿まで生きる、ということです。

最近では、a、b、cのどれもが著しく進歩し、癌は治せる病気になってきました。それでも癌が多いのは、他の病気では死ななくなっ、癌(または認知症)になるまで皆が生きようになっからです。これからは、癌になるか認知症になるかを選ぶ時代ともいえましよう。認知症にならない生き方については、次号に掲載する予定です。

どんな生活習慣がどんな癌と関係あるかは、ここに詳細に記すことはできませんが、至るところで紹介されていますので参照してください。

4. 診断

病気が診断できる、ということは次のようなことを意味します。a. 症状から異常が存在すると分かる、b. その症状のある場所(臓器)を調べる検査方法がある、ということです。

小さな癌の診断に先鞭をつけたのが、内視鏡(いわゆる胃カメラ)です。分かり易く言えば、内視鏡は身体の開口部から管(内視鏡)を入れて、外からは分からない部分を調べる検査法です。

内視鏡ができる前には、岩のように固いもの(進行した癌)に身体の外から触れることでやっと癌を診断できました。治せるはずはなかったのです。

癌は体中にでき得ますが、消化管や肺のように外部と口、肛門などでつながったところにできやすいので、その開いた部分から挿入した内視鏡で

診断でき、早期癌なら内視鏡での切除も可能です。開口部の無い臓器にできる癌、たとえば肝臓癌などは、超音波やCT、MRIなどで簡単に診断することができます。

癌は、大きくなれば色々な症状を出して騒ぎ立てますが、小さい時には痛くも痒くもない沈黙の病です。そこに癌診断上の問題点があります。

しかし、癌が治せる病気になったのは、医学の進歩が基にあるのは言うまでもありませんが、中でも無症状期での診断が進歩しました。検診によって小さな癌を見つけることができるようになったから癌は治せるのです。肺炎で死ぬ人がるように、癌も大きくなったら治せません。

ただし、自治体などでの検診は医者が片手間に行っている傾向もあり、必ずしも万全とは言えません(ココダケノハナシ)。

5. 治療

癌を取り除く方法は、物理的に除去する(外科手術)、放射線を照射する、あるいは薬(抗がん剤)で消滅させるなどの方法があります。手術が最も確実な除去方法として多用されてきましたが、後者の進歩にも著しいものがあります。

それぞれの治療法は、記してゆけばきりがないので、今回は省略いたします。



(※画像はイメージです)